

## ～ドビュッシーそしてドビュッシー～

これまで、

- ・ ペトラルカからドビュッシーまで
- ・ シャーロック・ホームズ そのレッサーアートの影

と称して、ルネサンスから近代までの時代の流れ、また、近代における芸術の変遷をおおまかにたどってきました。

そして、今回、いよいよ、

- ・ ドビュッシーそしてドビュッシー

として、ドビュッシーが生まれ育ち、生き抜いた時代に注目して、その音楽とのつながりをお話してみたいと思います。

前回、話題を「シャーロック・ホームズ」にこだわったのには、じつは、今回への伏線がありました。いわゆる「探偵もの」と称する読み物の原点は、フランス革命直後、実在の探偵：フランソワ・ヴィドックにあるといわれています。

ヴィドックは、徴兵された軍隊生活に疑問を感じて脱走し、軍法会議にかけられて投獄されるのですが、出獄後、獄中仲間をまとめて、密偵団を結成します。これが、治世者に認められてその後の近代警察の模範となり、ヴィドックは「事件簿」を物語にまとめるのです。これが、「探偵小説」の始まりです。

時を経て、アメリカでエドガー・アラン・ポーという小説家が、推理ものを書き始め、とくに「怪奇小説」の分野で評判を呼びました。ただ、当初はアメリカよりむしろヨーロッパで評価され、とくにフランスでは、ボードレールによるポーの翻訳が、フランスのある種の文学観をつくりあげていったのでした。

その中にポーの『アッシャー家の崩壊』という怪奇小説が話題を呼び、ボードレールの詩に憧れさえ抱いていたドビュッシーのこころを射止めたのです。

ところで、なぜ、この時代に「怪奇小説」なるものが流行ったのでしょうか。ポーやその他の作家が大量に出現したからなのでしょうか。

この時期は、ちょうど近代科学の集約が始まり、現在、応用されている科学の原理がすべて出尽くした状況でした。その象徴のひとりがダーウィンであり、そのワーク『種の起源』は、生物の進化論を唱えた画期的な研究だったのです。当時は「ダーウィン主義」などと罵られて、生物学者のみならず、宗教者からも大きな反論を呼びました。

こうした「進化論」をはじめとした近代科学の成果は、確実にその時代に生きる人びとの生活を変え、考え方を変えていきました。働き方、移動の方法、道具の大衆化はめまぐるしく進化し、「科学至上主義」の発端ができあがったといっていいいでしょう。

そして、芸術も「大衆」というものを意識した作品が次つぎと生み出され、宗教界、貴族社会を離れた「芸術至上主義」⇨デカダンスの世界をつくっていくことになるのです。

ドビュッシーは、そのまっただ中に生まれ、木の葉のように漂った、繊細で感化されやすい芸術家のひとりだったのです。

さて、なぜこの時期に「怪奇なるもの」が生まれ、アメリカのみならずヨーロッパまで蔓延したのでしょうか。

あなたは、「コックリさん(狐狗狸さん)」という占い遊び(お告げごっこ)をご存知ですか。

日本では通常、狐の霊を呼び出す行為(降霊術)と信じられており、そのため狐狗狸さんといわれています。机の上に「はい、いいえ、鳥居、男、女、0~9までの数字、五十音表」を記入した紙を置き、その紙の上に硬貨(主に十円硬貨)を置いて参加者全員の人差し指を添えていく。全員が力を抜いて「コックリさん、コックリさん、おいでください。」と呼びかけると硬貨が動く、というものです。

西洋で流行した「テーブル・ターニング」がもとになっているようです。「テーブル・ターニング」とは、数人がテーブルを囲み、手を乗せる。やがてテーブルがひとりでに傾いたり、移動したりする。出席者の中の霊能力がある人を霊媒として介し、あの世の霊の意志が表明されると考えられました。また、霊の働きでアルファベットなどを記したウィジャボードと呼ばれる板の文字を指差すことにより、霊との会話を行うという試みがなされたのです。

日本においては、1884年に伊豆半島沖に漂着したアメリカの船員が自国で大流行していた「テーブル・ターニング」を地元の住民に見せたことをきっかけに、日本でも流行するようになったといわれています。当時の日本にはテーブルが普及していなかったため、代わりにお櫃(ひつ)を3本の竹で支える形のものを作って行なったといえます。お櫃を用いた机が「こっくり、こっくりと傾く」様子から“こっくり”や“こっくりさん”と呼ぶようになり、やがて“こっくり”に「狐(きつね)」、「狗(いぬ)」、「狸(たぬき)」の文字を当て「狐狗狸」と書くようになったというわけです。

この起源は明確ではなく、レオナルド・ダ・ヴィンチが自著において「テーブル・ターニング」と同種の現象に言及しているため、15世紀のヨーロッパでは既に行われていたとも推測されています。

さて、1884年といえば、ドビュッシーが「ローマ大賞」を受賞した年です。欧米で「怪奇なるもの」が大流行している最中に日本にやってきて、「日本の近代」という時代に当て嵌まったというわけです。

「科学至上主義」がはじまる近代で、「科学で説明できない現象」が大きく喧伝される、科学時代だからこそ生まれた必然の「奇行」だったといえるでしょう。奇行は、文学だけに留まりませんでした。当然「宗教的観念」も奇行に走り新興宗教が大量に発生しました。また、芸術分野でもそれまでの書法ではおさまらない作品が数々と生まれる気運が出来上がったのです。

ドビュッシーの音楽は、ドビュッシーがその時々を得た「自然観」や、独特の感性の上になりたっているのですが、同時に、時代に突き動かされた「衝動」によって創り出されたといってもいいのかも知れません。